第8回埼玉県障害者アート企画展「うふっ♥埼玉でこんなのみつけちゃった♪」関連企画

# 1 障害者芸術支援シンポジウム「埼玉県の取り組みから考える」

日時：2017年12月9日（土）10：00～16：00
会場：埼玉県立近代美術館講堂　定員：100名
対象：福祉、教育、アートに関わる方、行政、企業、その他関心のある方

埼玉県内の表現活動や支援の取り組みを参加者と共に多角的に考察する支援者育成プログラムです。単に情報や知識を得るのではなく、登壇する美術や教育の専門家、福祉従事者の話から、表現活動や支援はもとより活動の広がりやこれからについても、共に考える場となるよう対談やトークセッションを中心に企画しました。昨年度に続き定員を超え、障害のある子を持つ親や、福祉分野以外からの参加も多く、県内における障害者芸術文化活動への関心の高さがうかがえます。

**［シンポジウム全般に関する感想］**

- アートと福祉がもっと寄り添える社会になってほしいと思います。
- 福祉そのものの見方も変わります。福祉の実践としての可能性を感じました。
- たいへん面白く聞かせていただきました。みなさんの本気度、悩み、テーマが交わり、白熱した様子はショーを見ているようでした。

## 1 基調講演「好きと評価をめぐって」

前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）

美術界の人は作品をどう評価しているのでしょうか？　それはほとんど語られないので、勘違いされているように感じる時もあります。決まった基準があるのでしょうか？　誰もが感じる、好き、嫌いと違うのでしょうか？　そんなことを話してみましょう。

※以下、要点のみ整理・編集して掲載

- 今、巷に様々な展覧会が溢れ、評論家も美術界も「作品評価をどう考えたらいいか」戸惑っている段階です。
- そもそも現代芸術には、何だかわからずゴミとして捨てられてしまいそうな作品が、たくさんあります。一般的に「きれい」と評価される作品は「もううつまらない」と思っている私のような美術関係者は、そういったゴミのような作品を本心から「素晴らしい」と評価しています。
- その観点から本展ほどゴミのような作品（ゴミとして捨てられてしまいそうな素晴らしい作品）が出ている展覧会はありません。



それを出せる自由さがある。何が出てきてもびっくりしない。それを誇っていいと思います。

- 作品の評価について、「作者の考えを読み取らないといけない」と勘違いしている人が多いようですが、学芸員など美術を学んだ人間は、「作者を考えるな」と教わっています。一旦、作者を切り離し、作品だけで評価する。「本人は評価されたくないのに勝手に評価して」と文句を言われることがありますが、そもそも美術は、そういうものです。
- 美術界での評価に、決まりはありません。「みんなが好きか」が一つの基準にはなりますが、それは「有名かどうか」ではありません。有名画家の作品にも駄作は山ほどある。
- つまり美術界では、みんな勝手に評価をしています。古今東西、評価されていないところから作品を探し、勝手に評価してきました。美術とは、そういったもの。そして、その「誰も評価してなくても評価すること」が大切なことです。
- 大事なのは、みんなが同じ評価をするのではなく、自分がいいと思うか、好きかどうか、作品を「愛せるかどうか」がポイント。私は、それが評価の基本だと思っています。
- その自分のアンテナに引っかかった作品を、同じように評価してくれる人が、どこかに必ずいるものです。
- 障害のある人の作品展では、作品を評価することで、作者や家族の生活に介入し、それを変えてしまうことがあります。評価は期待を生み、また、周りの人にも影響を及ぼす。そのことも、知っておいてほしい。
- そして、それを恐れず、「評価すべきものを評価する」。それが、美術関係者のとるべき道だと私は考えています。

**［感想］**

- ただのゴミと思われているものでもアート作品になることがあるという話に大変興味を持ちました。
- 美に対する価値観はあくまで一個人的なことであっていいと改めて確信が持てました。（ある種のコミュニケーションだとも思う）この「？」は生きていく上での糧だと信じています。
- お話にあったように、自分のアンテナに引っかかったものを信じ、何かを見たり聞いたりした時の感動や感想を、学校でも社会でも、もっと自由に発信できるようになればと思いました。

**前山裕司プロフィール**

埼玉県立近代美術館の準備室時代から同館に勤務。1988年「動きの表現」に始まり長年、同館で数々の展覧会を企画。また、ブダペストとモスクワを巡回した2003-04年「心の在り処」をキュレーション。2009年「障害者アートフェスティバル」実行委員を務めて以降、今年度まで「埼玉県障害者アート企画展」に携わり、また、2012年「アール・ブリュット・ジャポネ展」、2015年は埼玉、札幌、高知、福山を巡回した障害者アートの展覧会「すごいぞ、これは！」を企画。2016年は国立新美術館の展覧会「ここからーアート・デザイン・障害を考える3日間」を全体監修した。

# 2 対談「重い障害のある人の表現とは」

中津川浩章（美術家、アートディレクター）
松本 哲（みぬま福祉会総合施設長）

本展ディレクターと重度の障害がある人に長く関わる法人総合施設長が、それぞれの立場から、障害のある人の表現について語り合いました。

**中津川：**本展のキュレーションを7年続け、作品が変化しているなと感じます。前山さんの話にあった「ゴミのよう」だけれど心動かされる作品も増えている。それは美術的な視点だけではなく、福祉の現場の視点や価値観を取り込み選考してきたからです。選考会では、美術的な視点で直観的に気になっていた何かが、その生み出される背景を聞いて鮮明になり納得できることがよくあります。自分勝手に評価しながらも「これ何だろう」とみんなで考え議論すると見えてくる。そこには、人間が生きている感覚や目に見えないコミュニケーションがある。特に障害の重い人の作品では、それがビビッドに浮かび上がってくる。それをどう評価するか。展覧会はその揺れも含めて、その時の自分たちの考えや感覚が、鏡のように映し出されるものだなと改めて思いました。

## 新たな価値との出会い

**松本：**まず、これだけ多くの事業所が表現活動について一緒に取り組む時代になり、活動が点から面になってきたこと。そして、「ゴミのよう」と捨てられていた作品を問える時代になったことに隔世の感があります。福祉の現場でも「また壊した、ゴミを増やされた…」だから「それしかできない人」としてその行為や存在が否定されてきました。「太陽の家」には、そんな既存の物差しの評価により傷つき肯定感を喪失した人たちが集まって来ます。その既存の物差しにはまらない人たちの仕事を模索する中から表現活動が生まれ、今に至りました。中津川さんは、お互いが30代の頃から福祉とは違う立場で関わってくれていますが、何がそうさせているのでしょう。

**中津川：**最初は、作品が面白かったから。表現活動をしている施設などほとんどない時代、通常の美術とは違うところから生み出される作品がとても魅力的で、「どうして？」という素朴な疑問から興味が湧きました。そして、どんどん美術や自分の概念が壊され「人間とは」といった存在論的な疑問に謎が深まっていきました。特に重度の障害のある人の表現には、その謎がたくさんある。だから「ゴミのよう」とみなされていた行為の痕跡のようなものにもひかれていきました。

**松本：**当初、彼らの作品の良さがわからなかった私を、表現活動に駆り立てたのは、既存の内職仕事にはまらない人たちの主体的に見える生き生きとした姿でした。けれど、「うちの子は何もできない。迷惑しか掛けられない」と一旦、肯定感を喪失してしまった親たちには、そのことがなかなか伝わらず、また、工房集ができた頃は、周囲にも理解してくれる人は少なかった。しかし、専門家に評価され、作品展できちんと展示されることで、表現活動への理解が変わっていったように思います。そこで親たちが新しい価値観に出会い、「表現活動では否定されない」「我が子の表現が大事にされている」といったことも伝わっていった。

**中津川：**理屈でなく活動を通して、表現活動が障害の重い人たちの「生きることを応援するもの」と伝わり、家族の見方も変わっていきましたよね。

## 生きるための表現

**松本：**中津川さんの仲間（施設利用者）や表現へ向けるまなざしや評価が、展覧会などを通して社会的な機能として働き、仲間や親との信頼関係も深まっていったようにも思います。

**中津川：**僕自身、最初は重い障害のある人の行為をどう捉えていいかわからず、途方に暮れる感じでした。その一方、すごく魅力的でドキドキさせられる。それが同時にやってくる。そこには説明しきれない何かがある。だからその行為による痕跡を世に出して探ってみようと思いました。そして、困難な問題を抱えている人たちの表現に触れる中で、見えていなかったものがだんだん見えてきた。例えば、芸術のような文化は生活の上にあるものではない。「生きるためのもの」ということ。目が見えない西野克さんは、手に触れたものはすべて口に入れて砕き、最後は耳に入れて完結させる。その行為の痕跡には、何かひかれるものがある。問題行動と捉えられがちな行為ですが、それを探る中で彼にとっては、それが「世界を探るための表現」「生きることそのもの」と気づかされる。美術を超えて人間そのものを考えるようになっていきました。

**松本：**その気づきがとても大切で、重い障害のある人の表現に触れ向き合うことは、「人間をどうみるか」といった価値観を社会に問い、障害者に対する見方や社会的な存在価値をも、変えるものになるのではないかと思っています。２０１６年の相模原障害者施設殺傷事件は、障害の有無から優劣をつける「優生思想」によるもの。「何もできない人だから社会の迷惑になる」という。

**中津川：**優生思想のような理屈では、人はその理論の実感がなくても、その通りと思い込んでしまう。けれど、アートは感覚を通じて訴えるもの。作品を通じて「おもしろい」「すごい」と感じることで、理屈抜きに作者という存在を認識し、共感し、リスペクトが生まれる。それが、アートの可能性です。僕自身、それを感じて関わりを深め、人間や物の見方が変わったという実感があります。

**松本：**単に作品を飾るだけでなく「この価値を世に問いたい」という福祉の現場の私たちの想いに、応えてくれる機能にもなってくれたと思います。

**中津川：**僕は、社会と結びつけるメディウム（媒体）のような役割だと思っています。彼らの表現やその存在の社会的な価値を言語化してわかりやすく伝える。例えば、ある障害の重い人にとって一本の線を引くことは奇跡のようなこと。できないこととできることがぶつかり合い、それが線にリアルに表れる。その線をどう感じるか。そこがアート。それを内外に伝える。できることが美術ではなく、できることとできないことの狭間に美術があるのではないかと。さらに突き詰めると、重い障害のある人の日常では絶えず、生きることと死ぬことがぶつかり合っている。そのリアリティーが、行為や表現に表れる。言葉で表現できない代わりに表れているのではないか。そういったことを伝えています。

## 美術的評価を超える「平等性」という価値

**松本：**表現活動を始めた頃は、「描ける人の活動でしょ」と言う親もいて、なかなか活動の意義をわかってもらえませんでしたが、２０１２年に東京都美術館で工房集作品展「生きるための表現」を開いた辺りから、みんなが表現の「平等性」を実感し始めた気がします。「うちの子の作品はお金になりますか」といった質問もありますが、表現にはそういった評価とは別の価値があることに気づいていったと思います。

**中津川：**仲間１２０人の作品を展示して親御さんが一緒に喜んでくれましたよね。世間の美術的な評価は、表現に対する優劣であって人に対する優劣ではない。別の言い方をすれば、美術的に評価された作品も、評価されない作品も、同じ価値がある。等価である。美術は勝手に表現のクオリティを評価しているけれど、評価されない人も、作品を作らない人も同じという見方が大事ですね。



**松本：**一人ひとりの表現そのものに価値があり、「誰もが表現をしている」そのことをみんなが理解することが大事だと思います。

## 表現や関わりが人を育む

**中津川：**表現活動でもつい「この人の表現はこんなもの」と決めつけてしまいがちですが、単純に線や色を重ねていくような作品でも10年経つと明らかに変わっています。表現をしながら、自我が形成されているように感じます。

**松本：**表現活動を通じて「人格が育っている」「その人らしい風情が出てきた」と感じることもたくさんあります。

**中津川：**支援する人や周囲との関係性の中で、表現も変わり、自我も形成される。また、普段の振る舞いも変わってくる。目も合わせてくれなかった仲間が、ある時から急に親しく声をかけてくれるとか…。僕らの関わりを見て、仲間の方が僕らをジャッジしているのかもしれませんね。

［感想］

- 改めて表現活動を通して認められる、肯定される社会を作っていくために自分ができることを考えていきたいと思いました。
- 皆が肯定し合い認め合う場をつくっていきたいと強く感じました。

**中津川浩章プロフィール**

長年、記憶・痕跡・欠損をテーマに作品を制作発表する一方、（社福）みぬま福祉会 工房集等の表現活動にも携わり、障害者のアートスタジオや展覧会の企画・プロデュース等を手がけてきた。現在、福祉、教育、医療と多様な分野で社会とアートの関係性を問い直す活動、ワークショップや講演にも取り組む。キュレーションでは近年、「埼玉県障害者アート企画展」、「ビッグ・アイ アートプロジェクト」、「岡本太郎とアール・ブリュット」展を担当。ＮＰＯ法人エイブル・アート・ジャパン理事、ＮＰＯ法人アール・ド・ヴィーヴル理事、一般社団法人Ｇｅｔ ｉｎ ｔｏｕｃｈ理事。

**松本哲プロフィール**

生活協同組合職員を経て１９８３年より神奈川県内の通所施設に勤務。１９８５年、無認可作業所「太陽の家」を発足。翌年、知的障害者通所更生施設として認可された「川口太陽の家」の指導員を経て１９９２年、施設長に就任。現在は、法人の総合施設長、事務局長を兼務。また、障害の重い人たちの労働について取り組んできた経験を活かし、埼玉県発達障害福祉協会副会長・研修委員会委員長、埼玉県セルプセンター協議会理事、川口市自立支援協議会委員、川口特別支援学校学校評議員、越谷特別支援学校学校評議員、川口市障害者団体連絡協議会事務局長も務めている。

# 3 活動報告「埼玉県内の施設間のつながり、広がり、深まり」

埼玉県内でアートに取り組んでいる福祉施設の活動を紹介。昨年度、TAMAP±〇を発足してつながりを深め、共に学び合い高め合っています。

【感想】

- みんなが肯定し合い認め合う場をつくっていきたいと強く感じました。
- 関わり方や広め方などが詳しく聞けて良かったです。
- 埼玉県が障害者アートにとても力を入れていることがわかりうれしかった。私たちも関わりを広めるために、まずは横のつながりをしっかり持ちたいと思います。
- 職員の関わりの教育的側面に興味を持ちながら聞きました。教育実習の現場で子どもたちの日々の過ごし方のスタイルが絵に表れるという経験をし、日々の関わりこそ表現の源なのだと思っています。
- 埼玉は福祉施設の方々の熱意や意義を感じて取り組んでいる地域だなと思いました。

## ①埼玉県社会福祉事業団 あげお 多田美奈子

2014年度より埼玉県障害者アートマネージメントワークショップに一人の職員が参加することで、利用者の方の表現したものへの関心が強まりました。障害者アート企画展に応募したところ、まさにゴミ箱に捨てられていた作品が、選出されました。家族の喜びなどに刺激され、職員の意識も変わり、翌年度、表現活動が日中活動に加わりました。さらに、表彰や商品化という形で、出展の喜びや作品の魅力を共有する取り組みも始まりました。

昨年度は、出展作家がアーティストトークにも参加。施設内でも、作品を展示したり、作品のモチーフで自販機をラッピングしたり。それが地域の人の目に留まり、作品を広める機会も生まれています。また、TAMAP±〇での作品選考を、施設でも実践。職員が平等に選考に参加する経験が、表現活動への興味や理解につながっています。展覧会の実践で他施設から教わった額の作り方なども、活動の現場でとても役立っています。

作者や家族の笑顔に背中を押され、試行錯誤の4年間でしたが、今後も利用者の喜びや楽しみのために、職員みんなで力を合わせて取り組んでいきたいと思っています。



## ②みぬま福祉会 大宮太陽の家 佐藤佳織

2004年に開所した施設です。主な事業は生活介護ですが、みぬま福祉会では「働くこと」を大事にしており、当初は6名の仲間（利用者）でパウンドケーキを作り、販売していました。しかし、年々メンバーが増える中、パウンドケーキ作りに合わないメンバーも出てきたため、「仲間に合わせた仕事を」と、表現活動を仕事の一つとして位置づけるようになりました。言葉ではうまく表現できないけれど、自分のペースでのんびりと、歌ったり踊ったりしながら、それぞれの表現をしています。

絵を描ける仲間ばかりではないので、「拾う」「集める」「繰り返すこと」など、様々な表現を「捨てずに取っておくこと」を大切にしています。また、「これしかできないこと」を「いかに形にするか」についても、職員一同、試行錯誤しながら取り組んでいます。

そんな活動を続ける中で、パウンドケーキ作りを仕事にしている仲間からも、たくさんの作品が生まれるといった、広がりが生まれています。

## ③NPO法人 CーLひこうせん 野本翔平

表現活動をしながら「地域も巻き込むこと」を大切に様々な取り組みをしています。主な二つの活動を紹介します。

「ａｍｐかわいいサミット」。これは毎夏、熊谷市の八木橋百貨店で開催しているイベントです。目的は、私たち（ひこうせん）が「かわいい！」と思うものを発信し、それにより障害のある人たちの自立と社会参加を促進することです。百貨店が求めるクオリティを目指すことで、地域の福祉施設の商品の質を向上させたり、施設同士の横のつながりが生まれたりしています。2回目以降は、近隣施設や団体と実行委員を組織して運営しています。

もう一つは、「忍町アートギャラリー」。これは、地元行田市を「日本一アートな町にすること」を目標に、地域の有志を巻き込み一緒に取り組む、地域密着型アートプロジェクトです。商店街の店などに作品を展示し、街歩きと一緒に楽しんでもらうイベントを開催。これも実行委員で企画運営しており、福祉施設だけではできないことにも挑戦でき、また、地域の人たちとの関わりや相互理解も深まっています。障害者と健常者の違いを超え、住民同士として「自分たちの地域をより良くする」という目的に向けて一緒にがんばっています。

# 4 クロストーク
## 「福祉、教育、美術など、様々な角度から見た障害のある人の表現の本質や展望」

**小澤基弘**（画家、埼玉大学教育学部教授）
**酒井道久**（彫刻家、埼玉県立大学名誉教授）
**石平裕一**（NPO法人かうんと5代表）
**豊田亜紀**（多機能型事業所わっくす）
モデレーター：**中津川浩章**（美術家、アートディレクター）

「表現活動状況調査」や「作品選考会」など障害者アートをめぐる埼玉県独自の取り組みについて、その意味合いと可能性を美術の専門家と福祉施設のスタッフがそれぞれの立場から、時に脱線しながら語り合いました。

### 障害者アートと選考にまつわる意見

**石平**：選考会は「どんな作品が出てくるのだろう」というワクワク感があります。常連作家の作品も年々、魅力を増し「さらにワクワクできるか…」そんな気持ちでのぞんでいます。ただ、自分の事業所の作品説明になると「この方は自閉的で」とつい人物や背景を語ってしまう。本当は「この色が」と作品を語りたいのに。そこが僕のクセなのか…。でも、美術の専門家と選考する中でフラットな感情になれてきたような気がします。

**豊田**：自分の施設の作家を推したい気持ちがありながら、いいと思った作品もプレゼンできる。その空気感がありますよね。一個人として作品を見ながら選考を楽しめる。自分の施設の作品をプレゼンする時は背景を語るけれど、背景を知らなくても圧倒的な力を感じる作品にも出会えます。

**中津川**：この展覧会は、福祉と美術の文脈がクロスオーバーしてできています。僕ら美術の人間は、直観力や美術の文脈から見ているけれど、福祉施設の職員が選ぶ作品もおもしろい。福祉的な視点から語る作者や作品の背景を聞いて、心を捉えていた何かが見えてくることもあります。

**酒井**：障害者アートの選考の場合、私はまず、奇抜さや不思議さに目が留まります。精神障害や発達障害の人の不思議な作品。その次に構成や色使いなど。一方、一般の展覧会の選考では奇抜さはほとんどなく、構成や色使い、さらに何を表現したいかといった要素が加わる。

**小澤**：私は多くの選考に携わっているので、自分を信じて瞬間的に判断し、完全に作品のバックグランドは遮断します。奇抜さについては、作為的なものではなく、みんなが持っているもの。人間の本性が奇抜なのだと思う。健常者はそれを隠しているが、障害のある人の作品には赤裸々に表れている。奇抜というより、本性や本質を見せつけられているのだと思います。

**中津川**：障害のある人の表現はプリミティブな感覚に近いものが多く、人間の本質的なものが意図しないで出ているから感動も深い。個を越えて、集合的無意識へ広がって本質的なものが本能的に表現されているところに、人はひきつけられるのだと思います。

**小澤**：障害のある人の表現を知る以前は、重い障害のある人は自己省察（自らかえりみて考えること）ができないと思っていました。しかし、実はできている。いつも同じと思っていた作品も、よく見るとどんどん変化している。造形的な扱いも知的で知性が感じられる。彼らの作品を見ていると「知的障害」などその言葉自体がおかしいと思うようになりました。

**酒井**：障害者アートは、背景を知ると益々わかる。そこが一般のアートと違う。また、選考では入選を楽しみにしている作者のことなどを考慮してしまいがちで、そのジレンマがある。だからと線を引く必要はないが、障害者アート展とする以上、基準を設けたい気持ちがあり、背景を知ると見えてくる作品はコーナーを分けて展示したらどうかと思うのですが…。

**中津川**：そういった展覧会もあっていいが、そこで見えてくる問題は別にあると思います。障害の区分や見せ方を分けることで、見る人に先入観を与えてしまうこともある。多様な表現がクロスする場に可能性があり、作品も互いに影響し合い、おもしろい展覧会になると思っています。

**小澤**：障害者であるかどうか。この線引きも難しい。ゴッホもある意味、障害者だが、アウトサイダーアーティストには分類されない。何をもって障害者アートとするのか。する必要があるのか――この展覧会には、それを考えさせられる作品がたくさん出ています。それを多くの人に見てもらい、みんなに考えてもらいたい。

### 表現活動の課題や広がり

**中津川**：就労支援と生活介護では、表現活動の意味づけも支援も違うと思います。障害や施設によってもその課題は異なると思いますが。

**豊田**：うちのような精神障害の方が中心の就労支援施設では、メンバーと時々、「この作品には敵わないね」という会話が生まれます。眠れずしがみつくように描いた作品は、なかなか凄いものがあり評価もされる。けれど、症状が落ち着くと奇抜さなどは薄れあまり評価されない。それをどう受け止め解決するか…。難しい課題です。

**石平**：うちの施設には、モチーフを提示しないと描けない人もいます。画材もスタッフが用意して、最後は本人の作風に委ねるけれど、それは湧き上がる衝動からの表現とはまた違う。その辺り、支援する側として悩むところです。「描かせているんじゃないか。本当は嫌だったらどうしよう…」と揺れながらも、その人にとって描いている時間が穏やかで心地良いものになることを大事に続けています。

**中津川**：表現活動に限らず、それぞれの生きる尊厳を守る活動が大切ですよね。その辺り、どのように取り組んでいますか。

**豊田**：うちの就労の現場では、売れるグッズを作って売上を上げる、すばらしい作品を見てもらい買い求めてもらうことを、メンバーは夢見ています。しかし、資金的にも人材面でも精一杯で、お金を得ることだけを求めていたら続きません。亀の歩みでやり続ける中、例えば、con＊tioさんにアート活動の会議に参加してもらい商品化について一緒に考えてもらったり、TAMAP±0のつながりで「amp かわいいサミット」に似顔絵ライブで参加をさせてもらったり…。そのつながりからそれぞれも得られるものがあるので続けられています。

**石平**：個別支援計画を立てる際、以前は、例えば「絵ばかり描いていたら運動不足になるから他の活動もやらせないと」と計画が立てられていました。それも新たな提案になるかもしれないが、「それだけでは良くない」と決めつけてしまうのは違う。どんな活動も利用者と向き合い、いかに個人を支援するかが基本だと思っています。アートが課題になってしまうなど、縛られるものにならないように気をつけています。

**中津川**：表現活動は人間にとって生きる力にもなる。自身が癒されながら、それが社会化した時、他者に影響を及ぼす変化を見せる。また、それを仕事にするという、もう一段階別の社会化もある。埼玉では、作品の多様性を含め、多面的な広がりのある取り組みが行われていますが、教育やセラピーの側面からは、どんな可能性があるでしょう。

**小澤**：子どもたちの描いている絵を見ているとわかるのですが、学校にもグレーゾーンの子どもがたくさんいます。しかし、表現から何の障害だと断言できるエビデンスがない。埼玉では表現活動状況調査で表現を集めていますが、早く表現と障害の相関を示せるように分析すべきだと思っています。それが教育現場に役立つ。子どもたちを救えると思います。

**酒井**：7年近く若年性アルツハイマーのアートセラピーに携わる中で「アートにはいかにチカラがあるか」実感することがいろいろありました。セラピーは独特の手法で、まずデッサン力は求めない。「うまい」は禁句。特に印象に残っているのは高次機能障害の50代の男性で、最初は「絶対描かない」と言っていたが、アクリル板に絵の具を垂らす抽象画をやったら「今度いつやるのか」と。それから5年以上描き続けていました。



## 行為性の作品について

**中津川**：今回の選考会では行為性の作品が多く、小澤さんから「そこに美が感じられるかどうかだ」という意見もありました。その表現をどう捉えるか――いろんな考えがあると思いますが。

**小澤**：美術では、完成を判断することが大切。障害のある人の表現も本人が「ここで終わり」と意識しているかどうか。それにより違いがある。しかし、美術は一人でするものとは限らない。支援する人、発見した人とのコラボレーションもありだと思います。

**中津川**：創作に手を加えるのではない、作品を価値づけていくという意味でのコラボですね。本展の展示では、自分では言語化できない人たちの行為性の作品は、できるだけその世界観が伝わるよう、担当者が彼らのこだわりなども考慮して展示しました。

**酒井**：先ほど、中津川さんの話に出ていた、手に触れたものを噛んで耳に入れて完結させたものなどは、時間芸術ではないかとも思える。障害のあるなしの違い、現代芸術と障害者芸術の違い…考えることが多くなりました。

**中津川**：アートは見る人の想像力を喚起させるもの。すべての表現や行為がアートではないと思うが、はっきりした評価基準があるわけではありません。ただ、多様な表現があることでアートの地平が広がります。アートには社会を変える力がある――その思いで今後も一つひとつの表現と向き合い、みんなで考えながら多くの作品を発信していきたいと思います。

**［感想］**

- アートというよりも、人間の生きる事の意味や、哲学的なところまで話が広がり（深まり）考えさせられました。
- 共感できることがたくさんありました。他施設の方も同じように迷いながらも優しさを持ち日々関わっていることがわかり良かったです。
- 「学校にもグレーゾーンの子どもが多い」という話。先生たちは何か違うと感じていても、どうすればいいかわからない。音楽や美術は減らされていますが、もっと「表現」のチャンスがあったらいいのにと思います。

**小澤基弘プロフィール**

絵画及び美術教育の芸術学博士。長年、画家として作品を制作発表する一方、絵画を中心に理論研究を行い『絵画の教科書』等の著書も多数刊行。近年は、絵画制作者の経験を踏まえ、学校教育における図工・美術教育の研究も行う。「ドローイング（主観的・表現主義的素描）」を制作の主たる手立てとし、大学教育でもドローイングを積極的に導入。ドローイング制作と対話を通して、学生それぞれが自らの表現の核心を主体的に探る教育を心がけている。その教育実践から近年、人間の表現の根源に関わる障害者アートの可能性に着眼し、その領域の研究も進めている。

**酒井道久プロフィール**

新具象彫刻展（東京都美術館）創立に参加。国際交流展「センツァ・フロンティエーレ展」、「彫超兆　彫刻8人展」等で作品を発表する一方、埼玉県立衛生短大、埼玉県立大学社会福祉学科で美術関連教養科目、保育関連科目を担当。障害者アートの研究指導や、不登校児童・家族のアートプログラム、若年性認知症患者・家族のアートセラピー等に携わる。主な彫刻作品：大島小学校創立50周年記念「まだ見せない宝物」、千駄ヶ谷小学校創立120周年記念「大発見」、「中西悟堂像（日本野鳥の会）」（軽井沢ホシノ）、伊能測量200年記念「伊能忠敬像」（富岡八幡宮）等。

# 2 障害者芸術支援研修会「権利保護や商品化に関するセミナー」

日時：2018年2月3日（土）13：30～16：30　会場：社会福祉法人みぬま福祉会　川口太陽の家

表現をさらに社会につなげるために大切な「権利保護」や「商品化」。今回は定員を50名に絞り、より現場に即した具体的な事例を紹介して参加者の悩みにも応えました。福祉施設職員以外に企業や学生の参加もありました。

**［セミナー全般に関する感想］**

- 日常の仕事を見直すことができた。職場に帰って同僚に伝えたい。
- 直接役立てられるお話がありがたかった。
- 障害がある方を支えてくださるスタンスで、言葉の一つひとつが心にしみわたった。

こういったセミナーは、こちらが元気になれる。

- わくわくするお話が聞けて、とてもうれしかった。
- とても勉強になりました。またこのような機会を楽しみにしています。

## 1 「知っておきたい『アートと法律』の話」

講師：**岩本憲武**（弁護士／モッキンバード法律事務所）

協力委員でもある岩本先生が「著作権」など表現活動に関わる法律について、事例をあげながらわかりやすく解説。

自由な発想でバラエティ豊かな障害者アートの数々。でも、こんな作品ってアリ？　クレームがついたらどうしよう――そんな疑問や心配に答えてくれました。

**［感想］**

- 普段気にかかっていても、なかなか法律に関する話は聞く機会がないのでとても良い企画でした。
- 難しい内容を簡単にわかりやすく教えていただきありがとうございました。
- 著作権・所有権とてもわかりやすい説明でした。「TOYOTA」などと入った車の絵を描く利用者の作品も著作権に注意しながら作品づくりを進めていきたい。

**岩本憲武プロフィール**

1999年弁護士登録。埼玉弁護士会所属。東京、埼玉の法律事務所で民事、刑事事件と幅広く経験を積み、2006年、岩本法律事務所を開業。2016年以降は弁護士法人モッキンバード法律事務所（さいたま市浦和区）に参画。現在は重大事件・少年事件を含む刑事事件全般の弁護活動を中心に、個人や企業等の代理人として活動。埼玉弁護士会裁判員制度委員会、埼玉県児童福祉施設協議会子ども・施設サポート委員会など各種団体の委員等も務める。



## Topics

セミナーの内容から一部抜粋してご紹介！

### 「所有権」と「著作権」の関係は？

意外とモヤモヤっとしてよくわからなくなってしまうのがこの2つの権利です。

まず、作品を描いた人（作者）には「著作権」があります。これを売った場合、作品の「所有権」は買った人に移ります。「所有権」を持った人は、作品を他の人に売ることもできるし、極端な話、捨てちゃうかもしれない。しかし、そこに表現されている絵の「著作権」はまだ作者にあります。

「著作権」を持っている作者は、手元に原画がなくても、複写して絵葉書にするなど、絵の価値を利用することができます。逆に「著作権」まで譲ってしまうと、自分の絵の価値を利用できなくなります。作品を買った人がその絵を利用して、お金を得たり価値を世の中に広めたりするには、「著作権」も譲ってもらわないといけないということです。

このように「著作権」と「所有権」とは別の物です。

**［ポイント］**

- 施設全体で「作品の扱い方」を話し合い、文章化しておきましょう。
- 各作品について「著作権」「所有権」が誰に帰属しているか、はっきりさせておきましょう。
- 作者、家族、施設の間で話し合い、「作品の取り扱い方」をできれば「文書」にしておきましょう。

具体的な内容は、作者の障害の程度や家族の意向、施設の方針などによりケースバイケースです。

### 契約の時に気をつけることは？

契約は約束のこと。お茶1本買うのも契約です。「契約書」がなくても契約は成立します。

契約書はお互いのために約束の内容を文書にしたものです。「後日もめないこと」が最大の目的で、形式より「中身の明確さ」が重要になります。「契約書」「第一条～」なんて書かれていないメモでも契約書になることがあります。

**［ポイント］**

- 契約をする時は5W1Hが明確になっているか意識しましょう。
- 「受け入れられない内容」は修正や削除を求めましょう。

ただし、すべてに有利な内容を求めてしまうと、契約が成り立たなくなってしまうので注意。

- 契約書を作成しない場合も「これからのため」に、メールやFAXでのやり取りで「約束の内容（5W1H）」を確認して残しておきましょう。

# 2 「施設商品のもつ役割と魅力」

講師：杉 千種・山口里佳（con＊tio）

表現活動の広がりと共に施設商品への注目が増し、その取り組み方への関心も高まっています。グッズ研修会のアドバイザーを務めるコンティオが、施設での商品づくりの基本的な考え方や重要なポイントなどを話しながら、来場者の質問に答えました。

【感想】

- 商品は作っている人のことを知ってもらう大切なツールである、という言葉がとても印象に残った。丁寧に作者のこと、社会にどう発信するかということを考えて作るから、とても魅力的になるのだと思った。
- 「福祉っぽい」を抜け出すことが、障害者アートがさらに発展をするにはとても貴重だと思った。
- 福祉施設から世の中に発信していけるものを今後も心を込めてつくっていきたいと思った。
- “日常の「いいね！」をカタチにしていく”そんな素敵なことに何らかの形で関わっていけたら…と夢が広がりました。
- 一つの商品を作るのに、こんな突っ込んだミーティングをやっているとは、知りませんでした。
- 福祉とデザインや商品化の専門家をつなぐ役割は、とても大きいと感じた。
- 心動かされる施設商品は、買ったら終わりではなく買った時から始まる。そんな商品のファンです。

**con＊tio**
障害とアートを軸に中間支援を行うNPO法人のスタッフとして培った社会福祉観をもとに、2014年にコンティオを設立。様々な福祉施設とそれぞれの課題に一緒に向き合いながら、商品開発やアトリエ活動のサポート、展覧会やイベントのコーディネートをしている。福祉の現場・人の魅力を引き出せるような役割を目指して活動している。

## ●グッズ研修会

講師：杉 千種・山口里佳（con＊tio）

今年度は全9回（5月～9月：各2時間）に17団体が参加。「何のための商品化なのか」を考えながら、施設の商品開発やそのクオリティ向上を目指す研修です。価格設定や流通、商品管理など基本的な考え方を学び、研修で開発・改良したグッズ等は11月のグッズ展で紹介・販売しました。

## ●アトリエ見学ツアー

当法人の5ヶ所のアトリエを巡り、制作の様子を見学しながら、表現活動には何が大切かを考えてもらう研修です。展覧会関連イベントとして今年度は3回実施し52名が参加。日程が合わない場合は別日に対応しました。

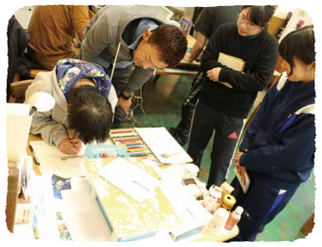
各アトリエでは、スタッフが法人の理念にもとづく職員の関わりや、表現活動による作者の変化・成長を伝えるほか、作者自らも作品について紹介。最後に、後援会が運営する「集力フェ」も体験してもらい、スタッフ（利用者家族）からも法人との関わりや表現活動について語ってもらいました。

【感想】

- とにかく継続していくこと、少しずつでも…という思いを新たにしました。仲間と職員と家族がトライアングルとの話…家族の協力をしっかり得られている点、いろいろな人たちを巻き込んで進めていく、社会に発信していくことが大切ですね。
- 一人ひとりの「好き」や「やりたい」気持ちを一つでも多く見つけ、社会とつなげられる様になりたいと感じました。

## ●インターンシップ研修

表現活動の支援のあり方を共に考えることを目的に一日現場に入り、障害のある人の創作現場とスタッフとの関わりを、体験を通して学びます。今年度は、翌年度表現活動を開始予定の施設やさらに表現活動を広げたいと考えている施設の職員と、美術を学ぶ学生の6名が、工房集にて実施。創作に入る前の関わりや、作者や表現について語り合うことからも、表現活動の大切なことを学んでいきました。

【感想】

- スタッフの方が仲間のみなさんのことをよく見ているのだと感じました。一人だけではなく、周りとの関わりの中で作品ができていることがすごいと思いました。
- そばに行くと、みなさん作品について教えてくださって、自分のことや作品のことを発表する力があるってすばらしいと思います。また、スタッフの方もどなたも仲間の方一人ひとりのことを詳しく話してくださって、みんなでわかろうとしていることが素敵だと思いました。
- 自分の支援の振り返りをすることができたのが、何よりの収穫でした。TAMAPでのつながりを持ちたいので、参加できると良いです。